

あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは、毎日、山へ木の枝をとりに行きました。

おばあさんは、川へ洗濯に行きました。

ある日、おばあさんが川で洗濯をしていました。
「どんぶらこ、どんぶらこ」と、
とても大きな桃が流れきました。

おばあさんは、びっくりして言いました。

「ありやまあ、大きな桃だ。持つて帰つて、おじいさんと一緒に食べましょ

う」
そして、桃を家へ持つて帰りました。

ページ見本



ジムは、一週間に六日間、朝から晩まで働いて、二十ドルもります。
毎日とても疲れます。ですから、家までゆっくり歩いて帰ります。

アパートに着いて、家のドアを開けると、そのには、いつも奥さんのデラが待っています。
ジムの大好きなデラが……。

ジムが帰つてくると、デラは、テーブルに温かいスープとパンを置きます。

そして、きれいな茶色の目でジムを見ます。

ジムもデラを見て、にっこり笑います。デラも笑います。

二人でいると、お金がないことも、疲れていることも、忘れます。



おいしい薬

一休さんは、子どものとき、安国寺で勉強していました。

寺で一番上のお坊さんを「おしょうさん」と言います。若いお坊さんたちの先生です。ある日、一休さんが、おしょうさんの部屋に来ると、部屋の中から小さい音が聞こえました。

一あ、またおしょうさまが何かを食べている！

一休さんは、静かに部屋の中を見ました。すると、おしょうさんが一人で何かを食べていました。

一休さんは言いました。

「おしょうさま、何を食べているんですか」

おしょうさんはびっくりして、

ページ見本



ページ見本

一休さんを見ました。

「こ、こ、これは、……く、薬です
よ。足の薬です。私は、おじいさん
ですから、足が痛いんです」

「え、足の薬ですか。私にもその薬
をください。私も、足が痛いんです」

「え、それはできません。

これは、おじいさんの薬です。

若い人が食べると死にますよ」

と言つて、おしょうさんは、
薬の入れ物を机の下に入れました。